裾野麗峰山の会・山行報告書

文・写真　　ＫＨ

山行NO　　山行ＮＯ．１８２５－３
日　時　　２０１９．０７．１８（木）
山　域　　斜里岳（１５４５ｍ・深田百名山）
コース　　清岳荘（せいがくそう）発４：３４－旧道・新道分岐５：２８－コル７：２５－頂上７：４１－新道熊見峠分岐８：１０－熊見峠９：００－旧道・新道分岐９：３８―林道１０：１６－清岳荘１０：３２－苫小牧一帰静
標高差　　上り　清岳荘約６８５ｍ～斜里岳１５４５ｍ＝約８６０ｍ
　　下り　　〃

滑滝を軽快に上る

雌阿寒岳から移動。下界の天気は良いが斜里岳は、南から強い風が吹き、ガスが掛かり上半分くらい見えない。昨日の雌阿寒も同じような天気。下界はマアマアだが上部は悪い。期待したオホーツク高気圧は、今夏は、まだなのか？？
斜里岳山麓は広大な農地。ジャガイモ・ビート・小麦が主な作物。畑ではオネエサンがビートの手入れをしていた。畑を仕切るシラカバが、いかにも北海道的で美しい。

清岳荘

登山口である清岳荘は２階建て山荘風のまだ新しい立派な建物だ。寝袋、食料持参の素泊まり２，０５０円。車中泊すると一人５１０円、トイレ使用料行くたび１００円かかるが、泊る場合は全て含まれるので素泊まりにした方が安い。
２階の大広間には其の日８人ばかりの宿泊者がいた。その中に、今は体力がなくて上れないので、今まで登った山の麓まで来て、其の頃を懐かしんでいる・・・という年配者がいた。年齢を聞くと同じ歳であった。愕然！！！私達ももうそんな年齢になっていたのか。自分では「まだまだ行ける」と思っても傍から見ればもうそんな年齢なんだ・・・。
少し心が萎えたけれど朝駆けで登るため早く就寝する。外はガスがかかり小雨がパラついていた。

右奥の斜里岳は雲の中

向こうはオホーツク海

３：３０　既に起き出した人のガサコソする音で目が覚めた。北海道は朝が開けるのが早い。この時間で外はもう明るい。「エェ～イ！もう起きてしまえ・・・」と私達も起きだした。朝食を済ませ、トイレを済ませ、荷物を車に積み込み、天気が良い事を祈りながら、清岳荘裏手から４：３４出発する。昨夜は、向かいの男のイビキが煩かった。
昨日は寒かったのに今朝は意外と気温が緩やかだ。今日は旧道から頂上に至り下山は新道を下る周

ミソガワソウ

快適な滝がつづく

遊コース。どんな行程なのか期待に胸が膨らむ。樹林帯を抜け目の前に一の沢が開けた。暫くは右岸、左岸と飛び石伝いで渡り歩く。沢床は茶色い鉄サビの色が延々と続く。
「水は飲めるのかなぁ」とＣＬに聞いたら、「飲める」との返事。そう言えば、茶の世界では鉄釜で湯を沸かして茶を立ててるなぁ・・・と納得。

旧道と新道の下二股の分岐を過ぎると両岸には、紫色のミソガワソウが満開。きれいな小滝も続く。沢の両岸に付けられたトラバース道はぬかるんで滑りやすく悪い。又沢の大きな岩を乗っ越したり、まいたりしながら更に進むと、突然目の前に素晴らしいナメ滝が現れた。簾を垂らしたような見事な滝が次々と現れる。茶色のナメに透き通る水が何とも美しい。
これだ！夏はやっぱりこれだ！沢靴で来なかったのが残念だ。水流の真ん中を飛沫を浴びながら遡行したかった。とにもかくにも沢靴を持って来なかったのが悔やまれた。

ナメはぬるぬるして滑る。チョット危ない急な高巻きを繰り返しながら高度を稼ぐとやがて上二股の分岐だ。奥に簡易トイレが設置してあった。この頃からガスが濃くなりＣＬは雨具を着る。私は寒くないので濡れるに任せた。ダケカンバやミヤマハンノキの間から、鮮やかな黄色のキンポウゲが群生。他に見る事のない花の大きさだ。癒される。
ここから馬の背まではジグザグの急なガレ場の登りになる。富士山で言えば胸突き八丁というと

チシマノキンバイソウ

ころか。ひたすら登る。馬の背に乗るとモーレツな風のお出迎えだ。身体にガツンと堪える。踏ん張っても押し倒されそうだ。展望のいい所らしいが、ガスは濃く視界もない。
祠の前を抜け最後のひと登りで頂上着。「風が半端ないよ」先客が風に煽られながら下山。
風に押し倒されないように踏ん張って撮った写真が「これだ！」瞬間、ガスが切れオホーツク海の展望が開けた。当たり！
とにかく風が強く長居は無用と直ぐに下山開始。上二股までは往路を下り、新道の熊見峠経由である。ダケカンバ林のアップダウンを繰り返し、熊見峠までの長い事ったら半端ない。

モーレツな風

チングルマ　　ウコンウツギ

ＣＬは道にせり出した枝にコツンコツンぶつかり怒り心頭。１，２４３ｍのコブからハイマツの尾根道に出、やっと熊見峠か。晴れていればスッキリとした尾根道だろうが、ガスの中では複雑な地形としか思えない。それからは転がるようにして沢へ一直線に下りる。
下二股にガクンガクンと標高をさげ着いた頃にはガスも切れた。上着を脱ぎ一息入れる。
静岳荘に着くと、駐車場は満杯状態。その中にはツアーバスもいた。２０人の団体だという。
あの沢沿いを２０人で歩くのは厳しいだろうと想像する。管理人さんが車のナンバーをチェックをしていた。聞けば下山確認だとか。有難い。
沢登の要素が多く私の好奇心を満足させてくれた斜里岳に乾杯！しながら次の行程場所に出発。

その他の記述（ＧＴ）

１．斜里岳は、１９９０年以来、２回目だった。
２．清岳荘まで意外と分かりにくい。
３．清岳荘は、新しくキレイ。消灯は９時。意外だが、水はローリーで上げている。
**　　トイレは、ウオシュレット。**
４．深田久弥は、ここに１９５９年上った。当時は、清里駅から延々、１０Ｋｍ近く歩いた。
５．清里・道の駅の温泉は、安くて良いところ。

斜里岳、雌阿寒岳を一緒に登ることになった。樹林帯を抜けると北岳の大樺沢に似た大沢に出る。

入口には、一面にシナノキンバイ（チシマキンバイソウ?）が見事に咲いている。そのほか本州では見られないものに、チシマクモマグサ、レブンコザクラ、エゾツツジなどが見られた。霧が晴れてオホーツクの海、サシルイ岳方面が見えたが羅臼岳はだめだった。ハイマツの海の羅臼平を越えて、大きな溶岩がゴロゴロする本峰の登りになる。ここには珍しい、イワブクロの花が多かった。

今回、珍しい花は全て写真に収め帰静後、牧野の図鑑で同定したが正確だった。後日、竹端さんと羅臼岳の話をした時、この花を見たかと問われたものだった。

雨が少し降ってきたが、子供たちも頑張る。最後の岩場を越えると頂上だった。記念写真を撮り早々と下山。途中から雨も大降りとなったが、別にどうということもなかった。長い下降で登山口着。車に戻り、今日の宿である網走の手前の小清水に向かう。宿は、涛沸（とうふつ）湖畔の原生亭。この宿は少し変わっていてスリッパを置いてない。だが、廊下などチリ一つなく、ピカピカに光っていた。夕方、甲子園で隣町の中標津高校の試合をやっていたが、結局延長で負けた。丸いメガネをかけた昭ちゃんに似たピッチャーが印象的だった。温泉は「弱性低張性高温泉」とかでコカコーラみたいな色をしていた。

チシマクモマグサ

8月14日（くもり）

●斜里岳登山

＜タイム＞清岳荘登山口12：30－頂上14：15～30－熊見峠14：50－登山口15：55

▽標高差＝875m

天気はまあまあ。午前中は網走刑務所、オホーツク流氷館、原生花園などを見学。女房、子供は清里の駅で分かれ釧網本線で屈斜里湖和琴温泉に向かう。私は目の前に聳える利尻島を彷彿させる斜里岳に車を飛ばす。登山口の清岳荘には簡単に着いた。

登山口で登山カードに記入しようとしてビックリした。11時頃、私の前に登った人の住所氏名が何と「静岡県駿東郡長泉町下土狩1188・中里宣資」とあるではな

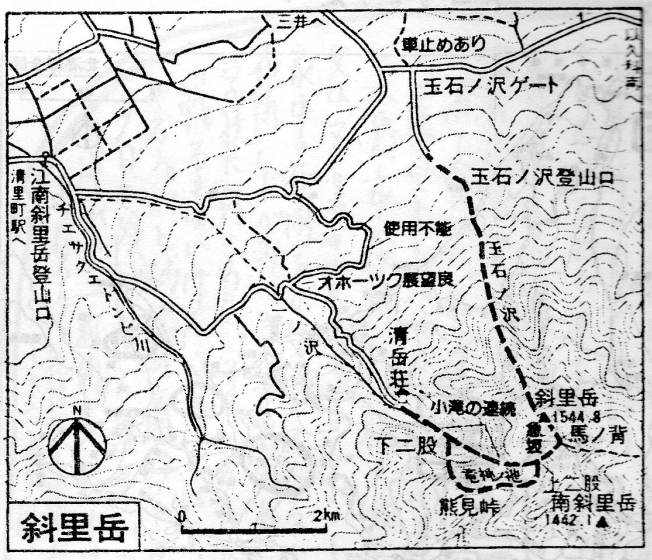
いか。ウーン。何たる偶然。

登山道は清岳荘の前の一の沢を真っ直登って行く古典的なルートだった。途中、羽衣の滝、万丈の滝、七重の滝など、美しい滝がかかる。ところどころにフィックスロープもあり、部分的にデリケートなので子供、年配者では無理かもしれない。下りもちょっと厳しそうだ。しかし効率は良いのでグングン稼ぐ。急登が終わり流れも少なくなると上二股で、上部は背の低い矮小化したダケカンバで一面被われていた。一見、カールの跡の感じもする。

年配の方と会い下降路について情報交換したが、この方が中里さんだろうか。聞きそびれてしまった。（帰静後、電話で確認したところもっと若い方で、御存知のように入会してくれた）

馬ノ背のコルに達し一気に頂上を陥す。曇ってはいるが展望は良く、知床方面、オホーツク海、明日登る雌阿寒岳など見えた。南斜里岳が立派でとても1500m級とは思えず、南アの山にいるような錯覚を覚える。これで雪が付いたら更に迫力が出るだろう。セルフタイマーで写真を撮り下山。帰りは、竜神ノ池を経由して熊見峠を越える。

車に戻り屈斜里湖めざし、家族と合流した。



斜里岳

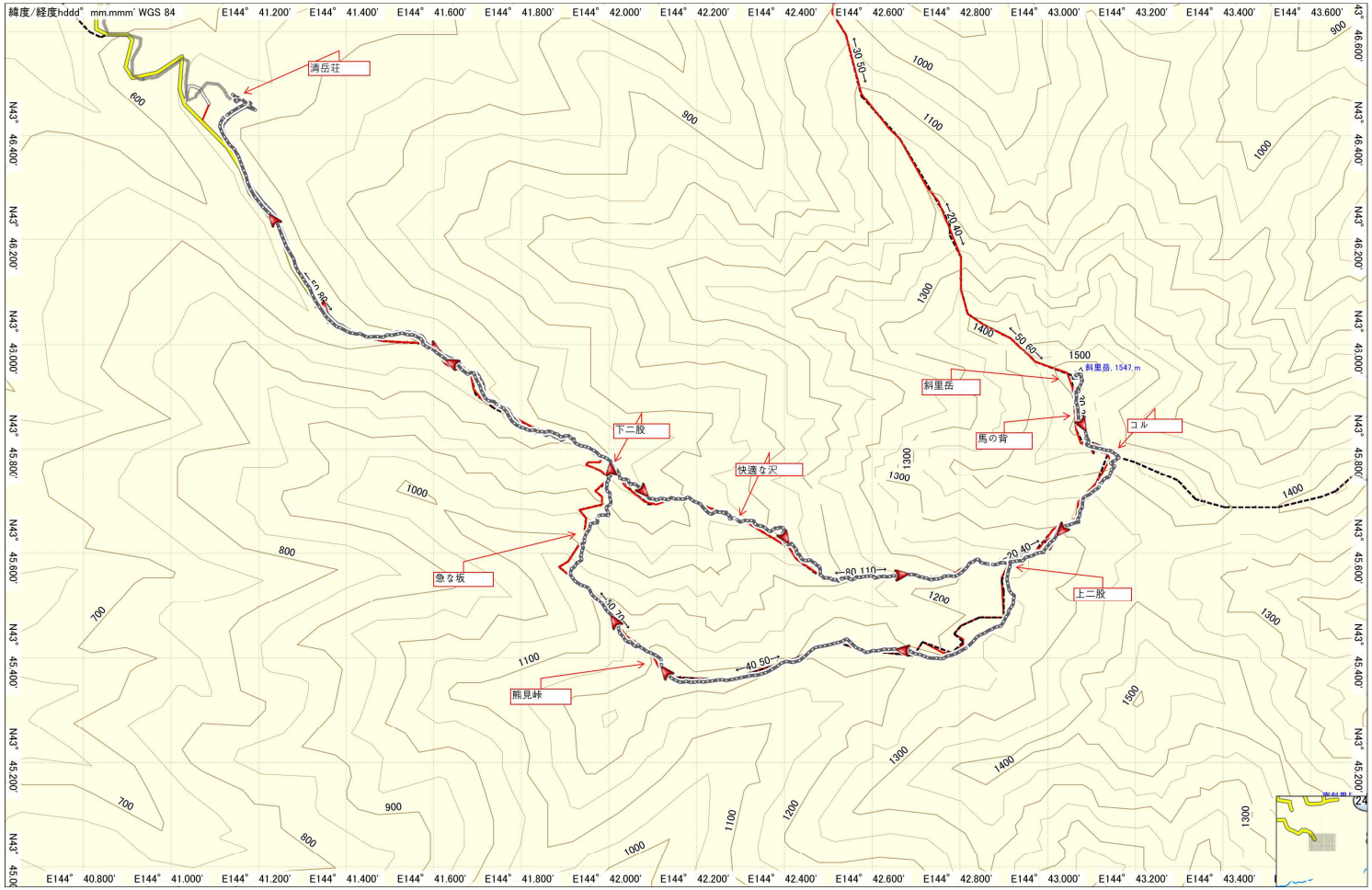
8月15日（くもり）

●雌阿寒岳登山

＜タイム＞雌阿寒温泉登山口7：45－頂上10：05－登山口11：10

▽標高差＝770m

今日もハッキリしない天気。女房、子供は阿寒湖でマリモ見学。車を飛ばして雌阿寒温泉へ。アカエゾマツ、トドマツの林を抜けるとハイマツがでる。オンネトーの湖と雄阿寒が見える。途中で羅臼で会った女性と一緒になり頂上まで行く。明後日は日高に登ると言っていた。写真を撮ってもらい下山。車で釧路に向かい再びブルトレで帰静した。いつかまた来たいと思った。



Japan Topo 10M Plus V3
CanvasMapple Co., Ltd 2014
Garmin Corporation 1991-2014

2019/07/22 15:20:35

GARMIN.